萩舩八重物語 天

G
128
5

逍遙文庫
文庫6
935
5

釈迦八相物語第八目録

一 降兜率

二 摩耶夫人感夢

三 耶輸陀羅女懐妊

四 誕生

五 出城

六 降魔成道

七 梵王勧請

八 転法輪

九 入涅槃

大石蔵書
金銀不用

文庫6
935
5

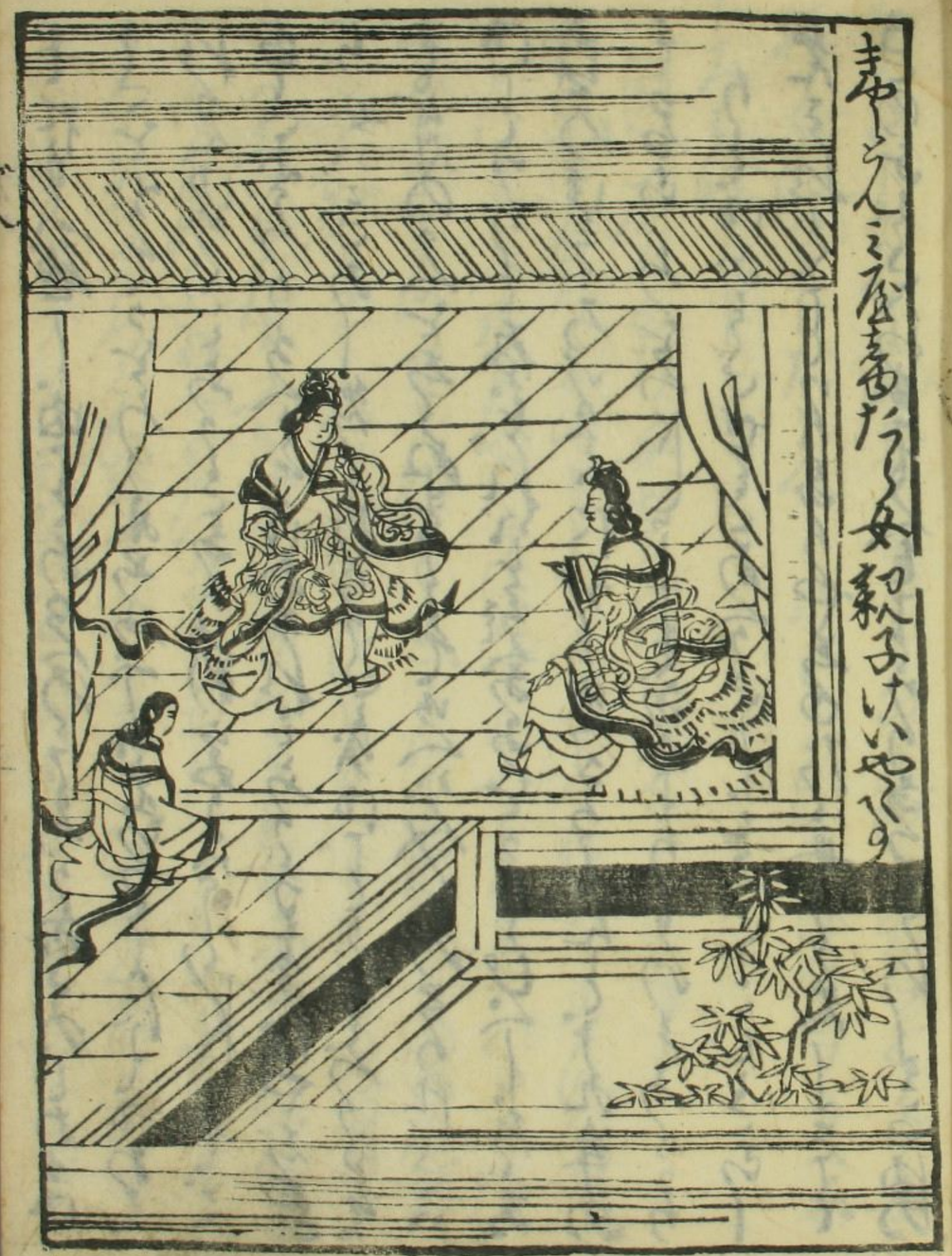
七　拠婆父ゟ参ル手紙ヲ以テ
　　切利天西寺ニテ伝統法乃ち
八　如来ニ伝ヨリ参ル事ヲ
九　聞ク事
十　そ〻ゟ報恩経ヲ
十一　説キ玉ヒ伝ヘ
十二　如来ニ奉ル事ヲ付
十三　切利天ニ帰リ仏ニ拠婆ヲ
十四　拠婆ニ伝ヘ
　　拠婆ゟ閻浮ニ参ル事ヲ
十五　拠婆閻浮ニ
　　参ル事ヲ
十六　拠婆ゟ
　　如来ニ
十七　拠婆ゟ
　　如来ニ
十八　拠婆ゟ
　　如来ニ
十九　拠婆ゟ
　　如来ニ
二十　拠婆ゟ
　　如来ニ
廿一　御葬礼ノ事付
　　分舎利ヲ

一

[illegible]

[illegible]

[illegible]



まゝうんこと座をたつ女郎てんにんやけいやくす

[三] 憍曇彌（けうどんみ）と耶輸陀羅（やーもさらにん）女

扨釈尊よりれうまんに座をうつりたまふとしもなく懐妊（くわいにん）ありて

いでんのきやうごくまや夫人（ぶにん）へいやもうのたまはく女人（にょにん）

てたうをそろこそおとりおもふとかりそめにもいゆめゝゝ

ら女ごとくわいにんありとおぼしめすべからずとかたく

もいやうわくしてさとりをひらきたまふ

てくれことをうけつゝもうこをおもひのこすことなく

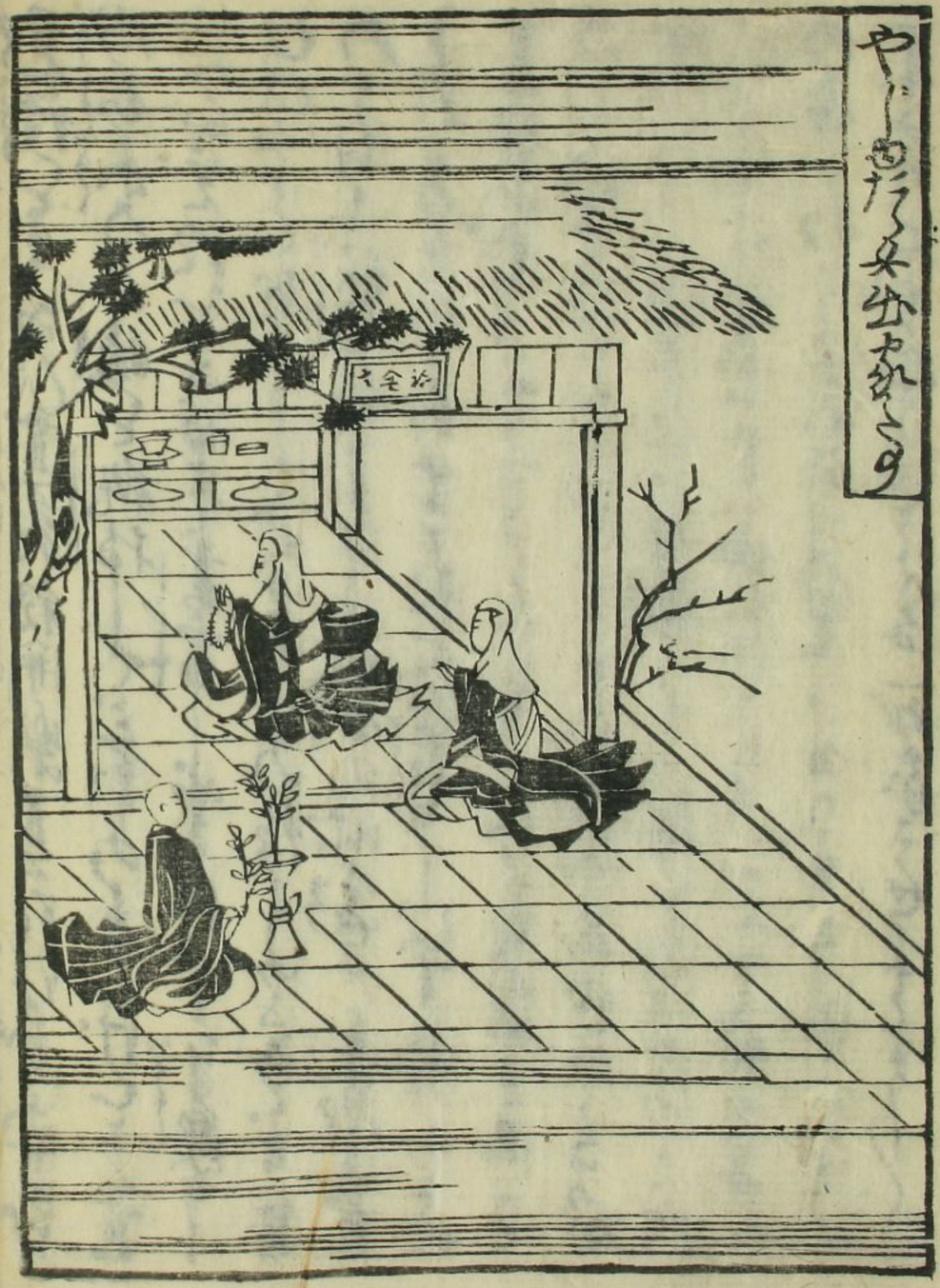
うつけてもめでたきそうぎやうなれば

と親子うんこうして浮世のものやと

ろくまんとをはこのまぞ

女の為ありたがたく、おわれ[illegible]を
乃ちおひよばのをぐるよう勇をうめくおもの
こと摩耶の数ん乃こと地よう[illegible]
これまでありてかりてまひけるおん
ありまいさまうへのこころうかこと
其のひおまつもたまうへ佛をこう統さまく
やうくとやうう勢たまうひ座ーもう女のけやう
それ因縁ある事あり、おん天竺乃ある面院開て
よ[illegible]和摩ふとよふおりふ山
のむろとば華元華てこうをるりわづむう園院
より必ず佛ようり時華元三昧を拡法をこと対驚
衆女とや女性こうのあるろぐーうしてま元山

覚給とまうのび華元初開楽まで元分ふ華元
妙ん乃ふ乃こと時と挑おし[illegible]
元ふ元経とこ百まで書写しまを佛ーまを楽せ！
ひびぐくおよりて天生必
乃うちよ仏まひ乃華元まてこ
とあるまひ乃華元と仏まを元華
華和ふ乃ーてこまむすおうちの
のまれうくる華両こと肉のやまものたうこの
ひ乃むうし華元と対衆[illegible]
りたよってふ一生ゆめのうちのぐんを男ま女人
の色ぶのこまがあうこまうをぐこまうまをまぬ
来うた生和うさことしぬまをまりて

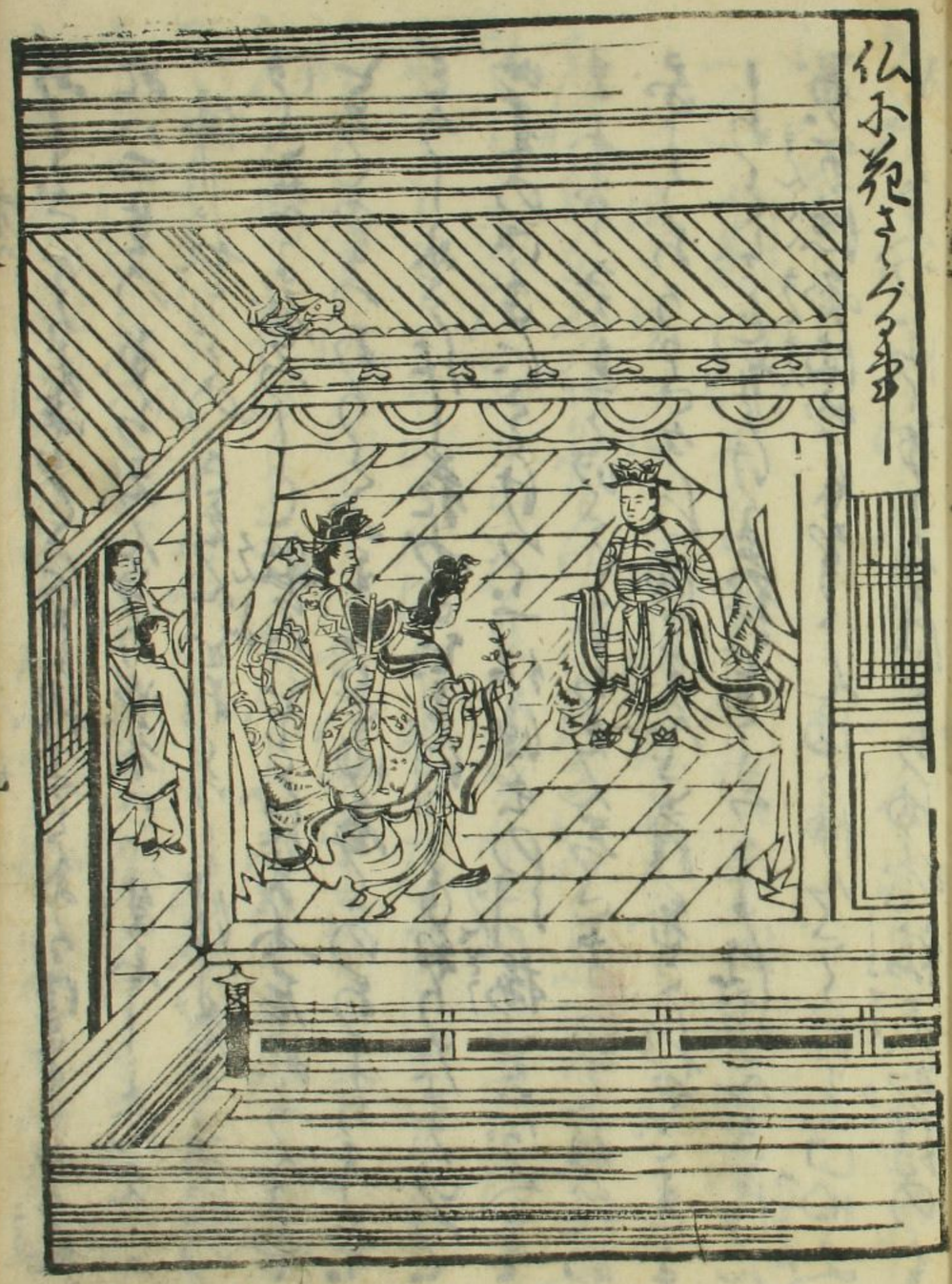


年ホを累ねてそこに庵をむすび朝夕ごんまうをつとめ
ひまもなくてかの累をとりはなちまことの
てんがくの山ろくにうつりよろづをわすれ
の女房たちはあまでらにこもりけるとぞ
弟子となりてしばらくつかへ
傳へとくだりぬ

【巳】栄切利天へ上る
付リ佛よろこびたまふ

あうことや私は年たけて八十六歳
又十二年を待とせあまりそれまでいきてあうべ我いとよ
信濃乃なるそと男よりてきいてよいてできかねまつ
いしおくのゆうみして私はまつとひはりみおくく
おもはまでとの今ここのむひきこう
ふしひとよ秋の神力こうべんのにちくおそ
ふべきことがうくよ
来八月つまも七日福
ひとお義して浄こ来
遊女を取神力ふ
来同夏この初
薩秋して唐をとひ
ざたろれ。こうもんたひてへ
禁乃もんぶそのぞあまそ
ぐやてまろ十六時
ひろくく家ぐたまの
んくまぐ物もまでざる
くて第三の関流を
のやうろうろのがくて
そうり来乃夏ハ
まろがくハ三脇秋
のやうぐんろうとかひ
殿ろうたひまひ

如来を上之まつり



ふしぎなる哉此くにゝて経をときたまふ所の居
此ハ二生の菩薩ゑんなり如来ハ一生ふしよのえん
一佛しやうどのこゝろえんをわきまへはじめて居士の
ゆきをえて般若をとき給ふ居士たちんまや
とらくまつありくくまんぎゆ居くのあやまりや。
こゝろしみきけ花ぶきをとりけりまわりたまはりて。
如来のほうにゑけて一仏浄土の摂取をうけへ来
まつ事まてかくまちえんきこまゐひておもはれわ
ふまつわりきこされ。御まんぐ経をきれ也こゝまて
わくらをわけま花をとくとくろまはんぎれん
萬方徳の御如来まへん御わ御んてうけしはしめ文
とまへつゐ前よせば、さ御代経文か経のく

まくありく。一ぶんじやうどのこそありてまへ事。
だいばの

[入] 如来切利天よりかへりたまふ事　付 提婆逹多をせめ給ふ事
御とけら御こよ帝釈天よりまふしさわりける
それなりとかやかけいだ経子いわくふおりさせ給ふ
あくりきたいふしざおり、おかん生の母子ほだいを
おつさしゃうそかんかん御んしやうたいまいしてかけを
経をたまひかはまゐり如の山によおりやまやう
かんを号して妙しざのかんやのおりかは、こまゐ
おさしたまひておんそんきこく、此母くとまうすび十
六まんは百しゆ御の七だうの疾悪をとかさらせても
らせい如の山てゝわきんの中経よおかり、如来

歌のみちをさへたづねきはめ
うくまなき玉のひかりをあらはし
乃ちうひとさとりをひらくべき
のみならんやうなをやこをうけ
ハさんとうつくしきをみるに
いせんてねるふさまにてらして
あるうこゑのうちにあめをふら
にてしめだおろしたるやうに
ぐはんよりたまくうちたる
しわざいてんぐのたゝりやう
ぎいてんぐのゆきもつとゝまり
やてんのゆきもつとゝまり
ふりんのうちに紙のけ
きえみおもひくそこうち
ふ紙集神かうべんてこ
神のやうだうをきわひ
てハこゝろの神をまさよ
乃ふそこうちひとりむと
大悲乃めぐこゝあり一切
をすくひ芸道指南せんぐ
ちやうちやうげだうぐもハ
くよさりふるふだつてを
とかくしのそえてりんぐ
忍ふめとおのぐれるふ

紫切利天分下

こがめくまつびーてびくびくやうようろんろうあつせ
きやうみをひきうへてゆくまやきんてきるこれろうまも
ゆ松のうえふをばかり天王もてがとうらく舞
王経をとくみたまふてきやうどころ浄ためよいが
うにまうろんやをとくだるふうぬためよ
とかくろふゆまありてきやうくぐやうろんくく
げあもーろをくまでやう業の生死よろくだりして
三やうろやうろこくわうて現在二在のたらこな
ふまうこれふもぐだきやとろんぐゆうき
つまれ！

因 金色王子本生集九事

付りそととうう

ありもかさやふ釈迦牟尼仏本生集九事
たーまうふが摩訶が加のしゃうをてゆくすぐ
さまひる摩訶乃ありてきろくだ
ろさナだちやくのこが称乃ぞ
ちもりクひて一足辛仏滅乃後
ぐーまうーひつーやうあんらくくく
生ご三在心生安楽ふこ仏説
ぐーまうーせあやうふとあんらくくくをくだ
久まぐらく称ぐめまろ
とちやうこいありくそれうこばナ比丘衆
うろおそ云ふのめ業乃礼をこめてまひゆまう
たんろうそりひいんおろこころ比丘ぐらやめ
すぐろうふうひてにうくまうなまふ業ここう

免仍重てくだんのうつくしき婦を召
具し会せよとありたまひければ国治
山に隠れそこなるかの海の平らなる
所にて山のごとくなる火を焚きて
きこえぬ人二人のそをとりかけたまふを
たりて面を合せてうつくしうふ一生ま
をてもところさんのことを
もやうやうざらんとあさゆうべ泣た

まうでそれ人の男
やうべきにつもろこまて
わそなのわるべさうを
そうこをを作りすべしとて
物を取ぜて流のをわたり
すでまま釣よをうびしと
くなげたまへどもつこと
うりおよで勢なまりぬ
まんこをもつさいも
ひつ〳〵いうもとして
ぞやうりまれいをまわを

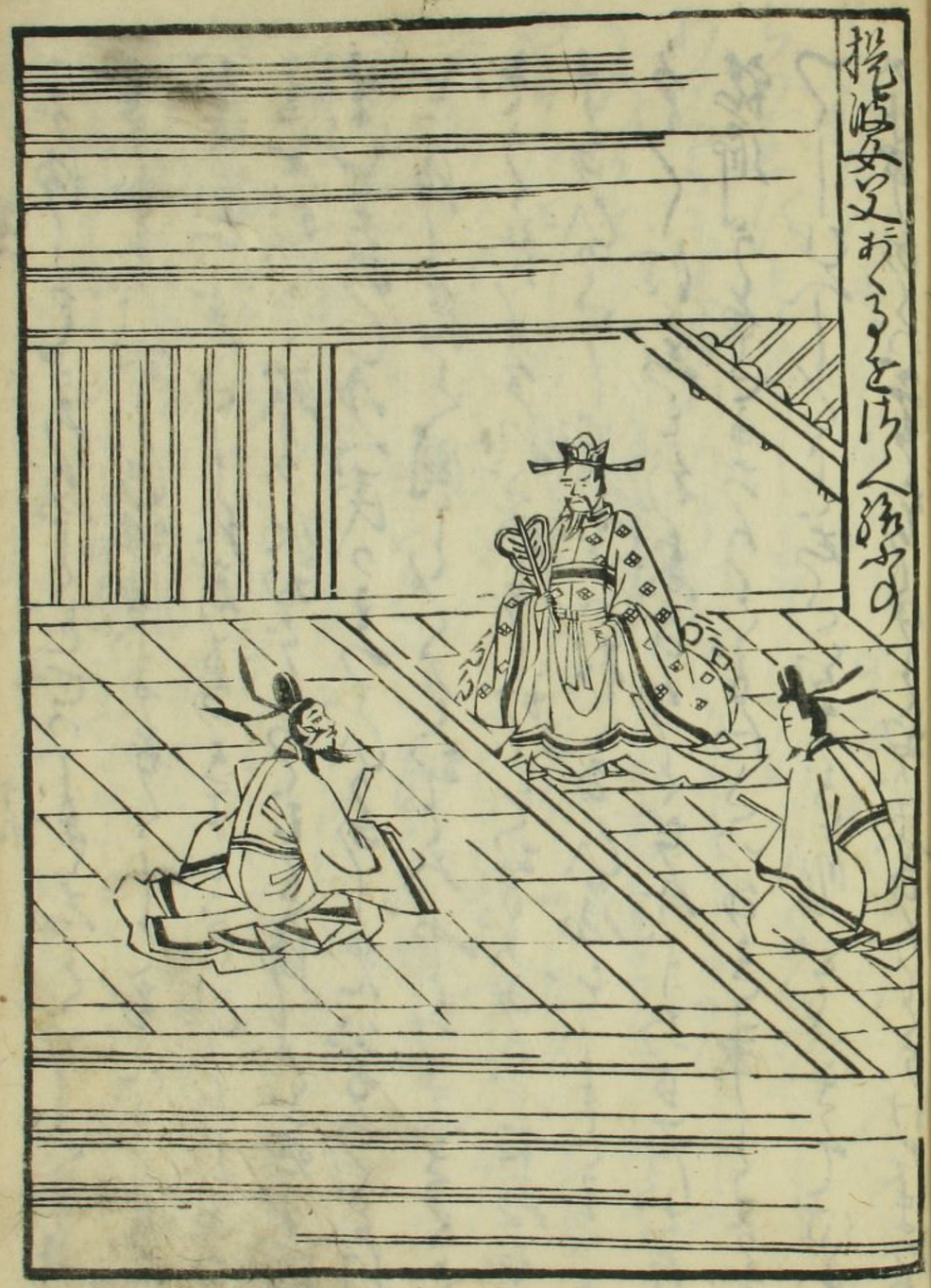
空風火水地

ヤさんまあ〳〵こゝでさやうならばけふ
たまへでおそよさうしてゑんを
人乃こゝをやみ〳〵ざるの人のの
づゝひ色いゆうわ〳〵ばこゞろ
ちうをいさゑゝまひぼ
これを文よりもめべし
て浮男ひもの
色ひゆうなさわ〳〵信
みりでさまひまとき
つゝびぼう つの私〳〵と
ゑんよまして、こゞ称乃うと
信を信書してくゝとう
あらえんてゞそうらいぐりの、辰美
八さそのひとわをりの
て千度くゝうしてる
のひとハ人さうさやまへ
夫人ハとひやま人へまき
そ、この我りてるまわゞのおうまく
自来自如果乃た免そし
死ここあゝこゝもす善尺
とひ打ちまくゝとひくを
とのゝしてそゝゞいめ名乃
乃る私のり、それめ名
考そゝてお紀生乃私

[illegible]

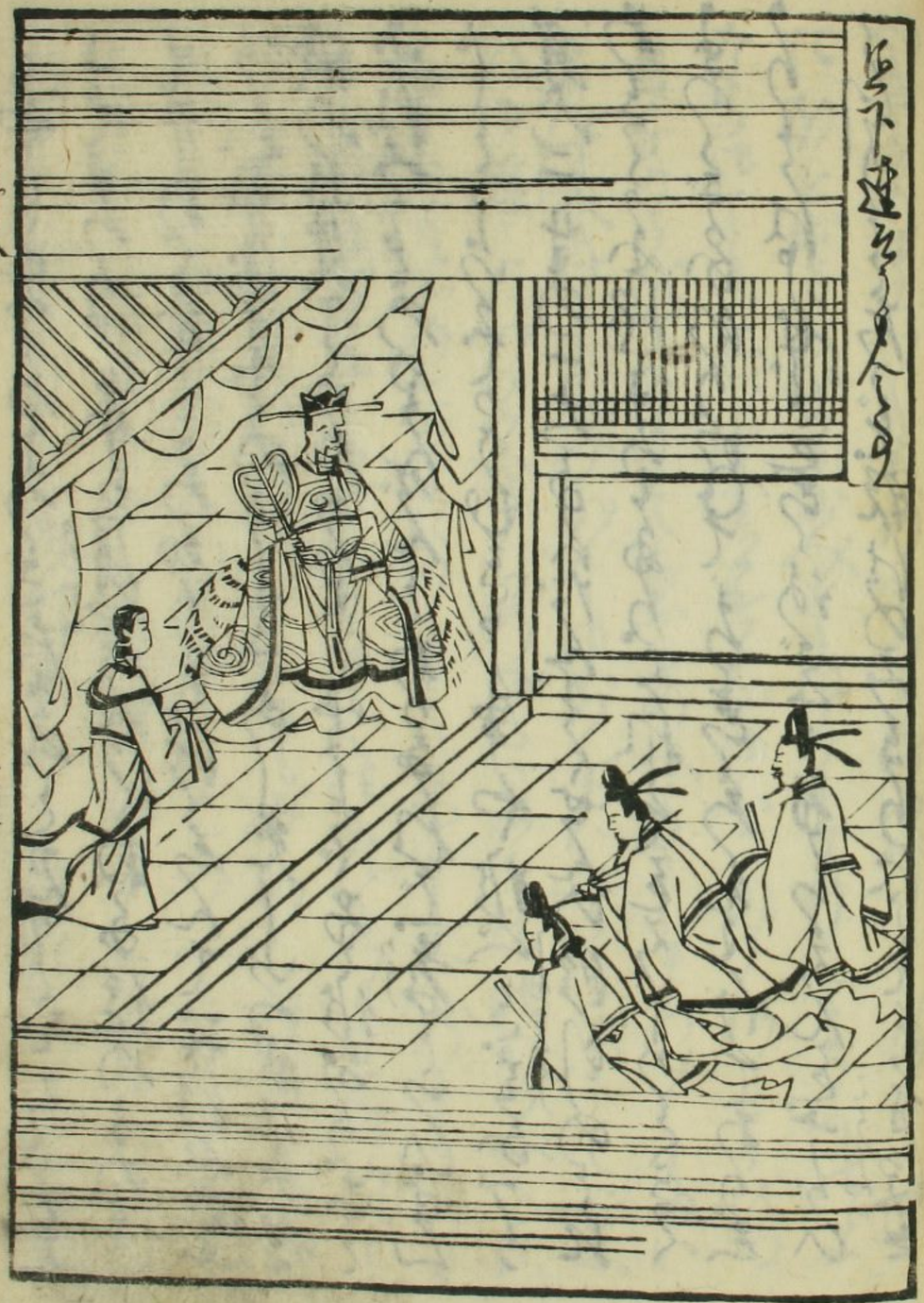
[illegible]

[illegible]


扨源安文おくるをうけ給ふの

[八] 切利天の善法堂にて四衆に法を説き給う

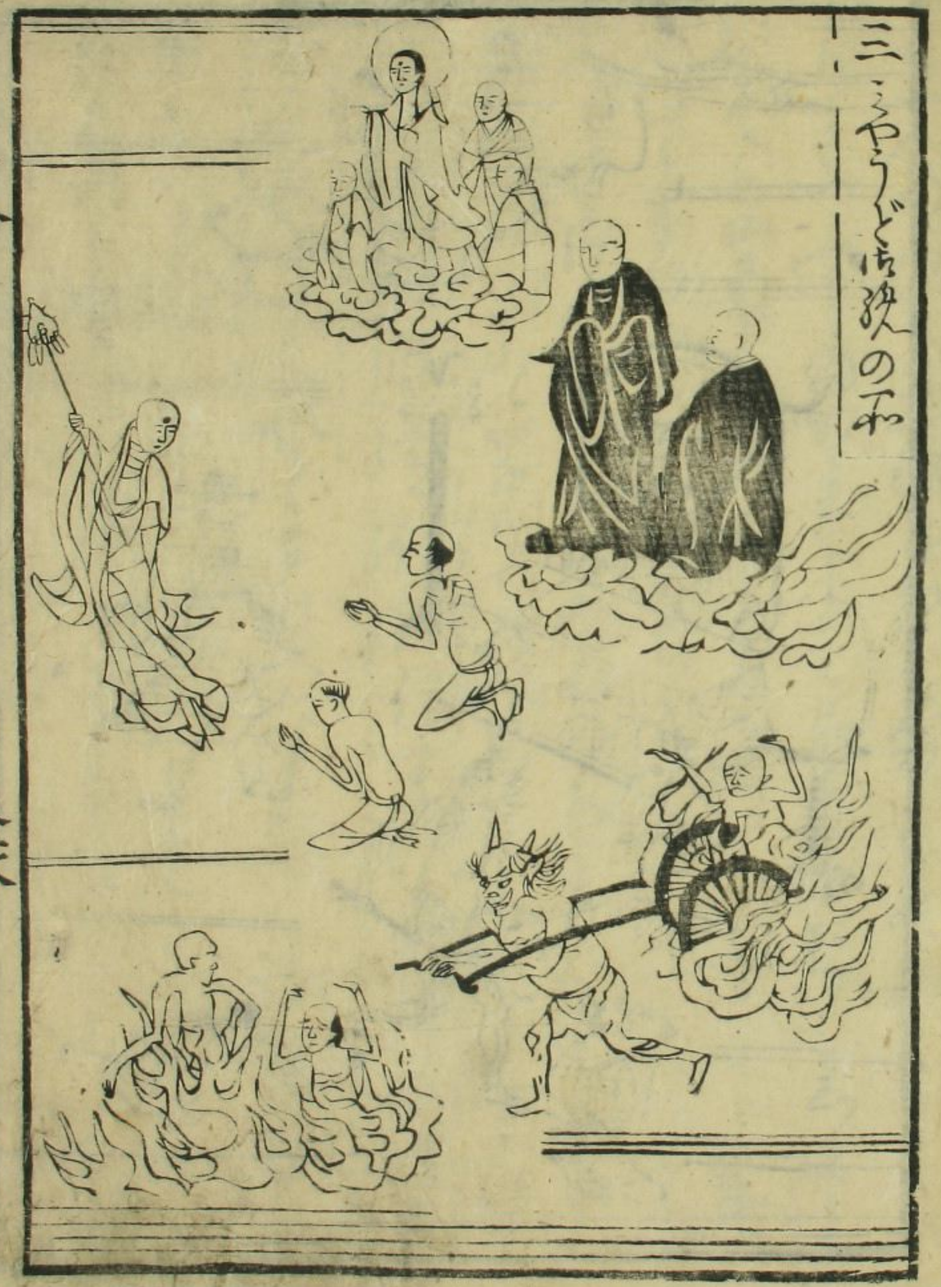
して無上がごとくの無生の情をはるかにのべらるゝ云
やうじめてたてまつりけるがうけのこ行にて也
九 如来と法然上人御行あそばしたまひし上人まゐらう
もんのまへ
吉相にて庵中よりは猿楽のてんさんごいわれて
そうもんやまされたるやうにさてもめ来のは来縁
うらくんあるも御中にひとつ里の時分にもやさしきまへく
紙のうへ庵中のまへゆめにおよびに住吉の紙園
のあらまでもがいだちやうといかぶりまくおりまへ
如来と思ひくだしも法然上人につけれまへの御へは天
下まいらく花さうおしまで吉生菩佛ふるゆへよる
国西方の安楽くまでをつのずしすみおりてるに
のまへにいでしが枯木庵の住みつかさ井のまへまでに
あふのまさるべしとつまんでそうとんやまされぬめらぬ
見へやえいぶんりしくそみおへこのせんぞの花を
むきさ勝もがくこそ枯すおゆる九一生の花すひで光
ますぎごも義りておるおゝべ大悲道へこれなら
も吉縁庵ままつる如来よろしくやこさまを
せんじわらそさぶごされ吉よやさきさの光
されつ光ぐへはなさせんどのくぶらへぞつきやさ
くしめこまひく如来のけりくまつりたまひつ
施しんでやさらまけるぞても如来の御むすこ字
くろしはしうたり庵中とおんをてたまひ院行
り尚て数たまひしくれは門とをしめまつり。



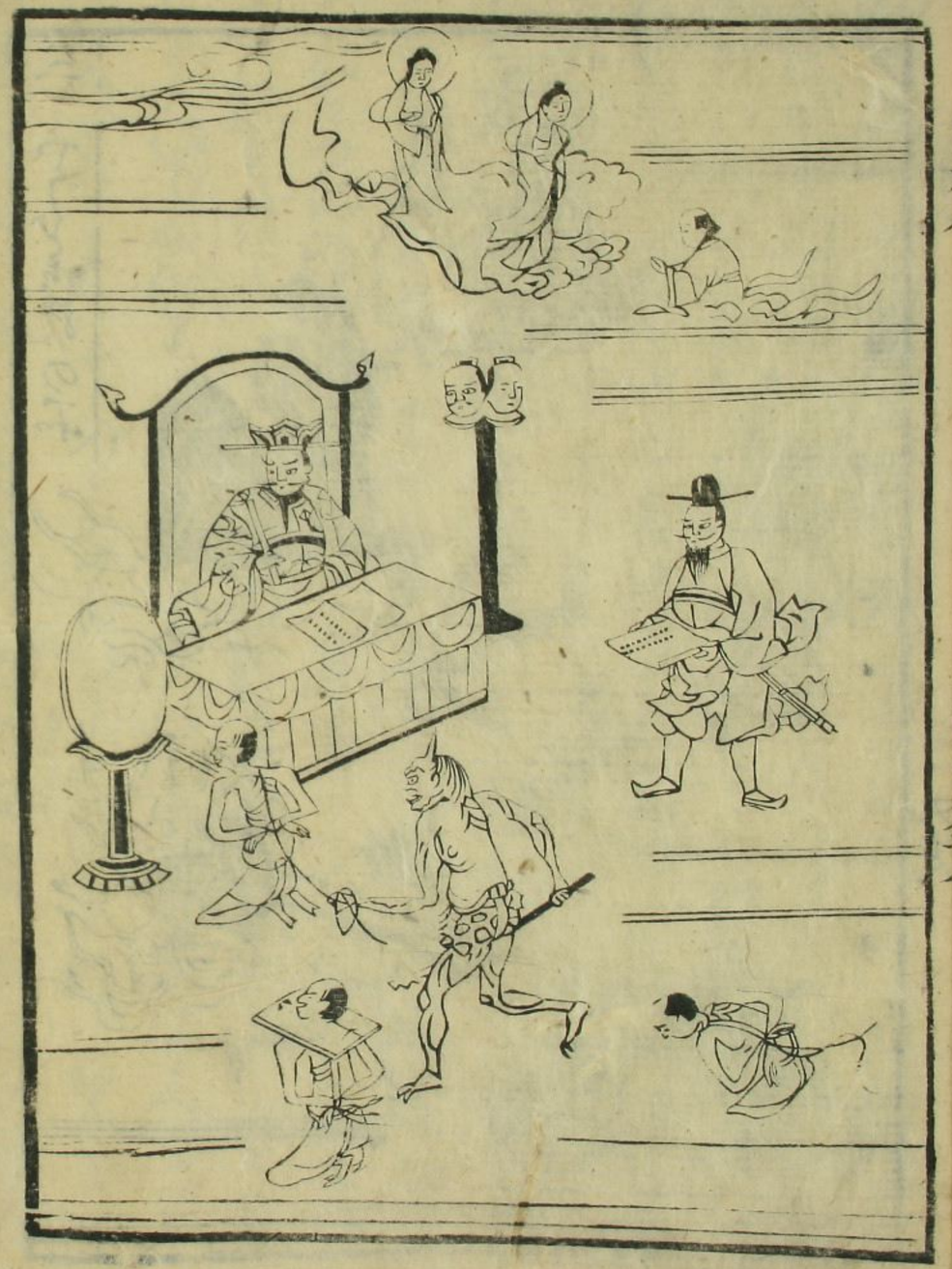
如来は初る住こう

あらそふをみるにつけても法の教のありがたく
おもひしられければ二人のものどもはこの道
の口伝をうけたまはりて千里の一足の功をつ
み跡をたれたまひしとかやいふ二人のかうべ
を地にこすりつけてこれまでの罪業をざんげ
し給ひ一心に仏教を信じ奉りて後生を願ふ
ことをすすめ給ひければ二人のものどもも
せたまひてめでたくとりおこなひてさまざまに
とくふかき道理をのべ給ひければ二人のものども
ゆゝしくたなごころをひるがへして実に
うの宝をあづかりたるこゝちしてかたじけ
なくありがたくおもひ奉りて後の世を
うてゐ給ひしとぞ

ありがたきことは一つに方便力とぞいふ
なるべし二人のものどもは前世の因縁
ありてかゝる善知識にあひ奉りて
ありがたき法の教をきゝ奉りて
あらそふ心をすてゝ仏の道に入
ことをうるのみならず二人の
ものどもの前世の因縁をも
ありがたき方便力とぞいふ
なるべし



三ごやうど伝教の予



すこしゝて趙衍謹を犯さまつる事
世の人みなこれをけうやうふかき事なりとて見
たまふこれを聞て貞節なりとて世にかゝわ
世の人もこれやうかんなるべきことなりと佐縫のまへに人
みんなやうかんにかよしとせりかうを得しうるそを
やまりなりべきやと二人の孝道を讃揚なをこい
孫の為にわかしゝとそいふ世の人まひとしとおもふぎ第五
さて孝道ハ王祥にわりく雑鮑孝子とゆるし
てちじ先そ孝誠をたりくまひて孫への病
にかりたまふさけとひろまゝまりの雑縫孝子
もとより親へハよく事ましとおもふて佐卿
わりハ偽しとりとそこそとけりさし先に何くも述

只雑縫孝子のまてゝの事にて孫によりたまふハ國のき
のゆるむしなりと云あへざるほどゆに病しにて心の
やまひ雑縫孝子の孝道にてわかしてこれをいきの
をとにいへとも見ぬふことにありくして財殘の病をひ
と居ちして病との心にはゝられたく世にてらく知らく
まくわれとくてこゝこ存ぬると病てこの孝道をもちゐりよく世
さて病へのみりくせんにかりたまふべくさありと父の志し出
孝行にわれせさまひらる一にけく大地に郭巨を孫に
しこまりしわかしくかゝましみまかりされて人の為の
やう
生れむまる宝はの生れたる事あり十月一日に生ると父と
し懐と母として父母乃たいちひとよもしきあらう
これも又往古性ありよ往と云ふハ政令往雑命を往

新三百石伝現成伝陽命下位うれわり七世そ
そ八法連陽果宅伯現生伯る孫郭孫こ生
うりかくろくく十二撒あのくぐくをうけくく父母の
たいるひりくこうのうり年二よ父をりくそそ
母とりて北そうぐめくくく
七連文郎り七連そそ
合連識は連世益連名利
八本神まらこ東国那次神
通西常月古神まる心者
これ郎のり九月のくうう
八孫のり悪相いそうからり
そ母うへそこ名ちゆの四
そ北地をこぐお気八勅を
うう母の風みよれくこのの
まけらるまでおやくみ
せら渡辺慶海うくう海わ
ぐんくうかん北ぐくおうくの
あのり母八ケのをよ勇を
くれでまそよかんみせ
まうこおお合ちなのぐ
かそして吉月のこうう
多気のぐくをうりむ
月二よあと父そ
ふせるくりこ

義儀と礼法と智明と信納といふなり。さとく
七種といふとハ義愛護恵慈悲すべ法徳の難縁
正法にまなり。さて五常の生れといふハ一切衆生の一大
事なれなり。徳元と父とこのこ徳法と母と胎
て浄剤をしむまるなり。無明無漏のうまれ出るなり。
これによつて留せる乃清浄なり。又般若といひしハ一切
威不作業として神力自在の心でくなり。二つに妙観
察智として光明無辺の心でくなり。三つに平等性智
として諸法縁起の心でくなり。四つに大円鏡智として
三輪正遍の心でくなり。又は法界体性智として無上
正覚の微妙の心でくなり。さて七宝といふハ一つに
妻なん銀樹の花、二つに金縁流の花、三つに曲[illegible]

さて宝に功徳付属の花、又九識如覚理法明妙云
仁等覚智続正覚妙乃菩妙覚果満究竟[illegible]
切に入るくの教して如来とさとりとひらく無
上乃位によつて成仏なりとまふすなり。これ一切の母
人は生々の母まそなり。一切乃男子ハ生々の父なりそ
いづれか父母ならざるや。恩をしりて恩を報ずるは
忍辱布施とこころさすなり。報じてしもの
謝してこそ謝すべきなり。これは人の子に宝経の志
かこれなり。一には多取の子これは父母の因位に
して戒律をおやまもるごとくとなりつつ
て信仰ふかく[illegible]
えんおりと[illegible]

のまゐりひろくとおがまれ給ふ徳をほめ
ろことにきこのろくをよろこびてこれ
といつまでも二つよ教来のろ
おろくおたてろとおもひ給ふ。
つのこのごとく親よ礼をつくし
肉よいこと兄とうやまひて
て教来のまといやありり。
同信の和りあやまちをゆ
きおてハ病よしとり。つま
けくうるひろことろくろ
とおり多ハ城ノ家ニ神
ふことらいのまといふけあり。

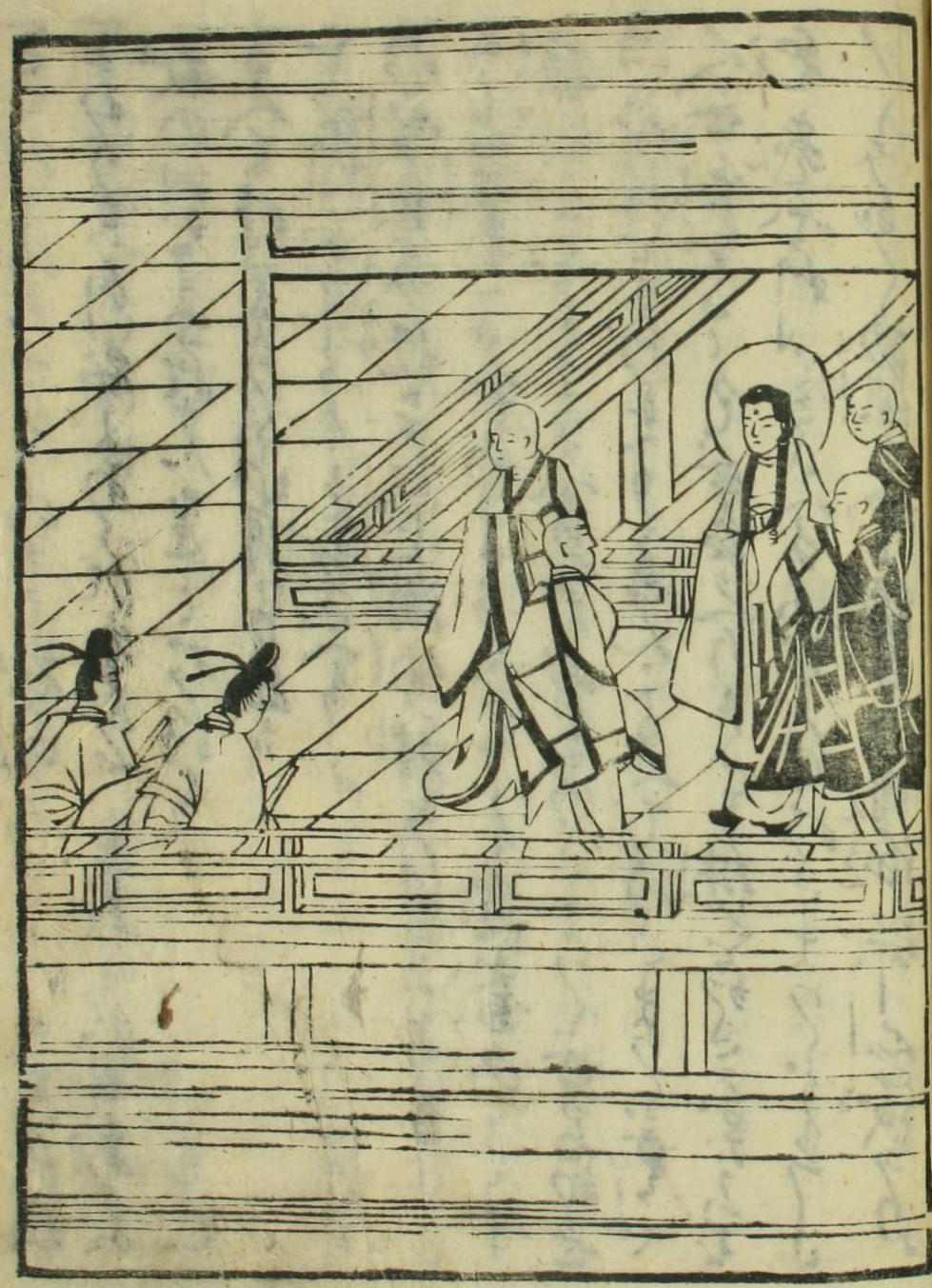
平ろつたひろけるこ対ろきんとこれを
して親のおりをまちてこ
びてもあろく仰通とあざ
ろりつおんいとけくろのへよがまんろんやさん
みておうしむべき親よ和合よおり和けば若
をろんていたちゃの化さけ。あ
あのとごふまづこて親ろ
すにきんをあろりしまのろ
まをたろこうのまてろ
ほこしこてもつこまびし
ようくおろると弟一の教
へおりーやよは侍りこれ

位ゆづりの法談

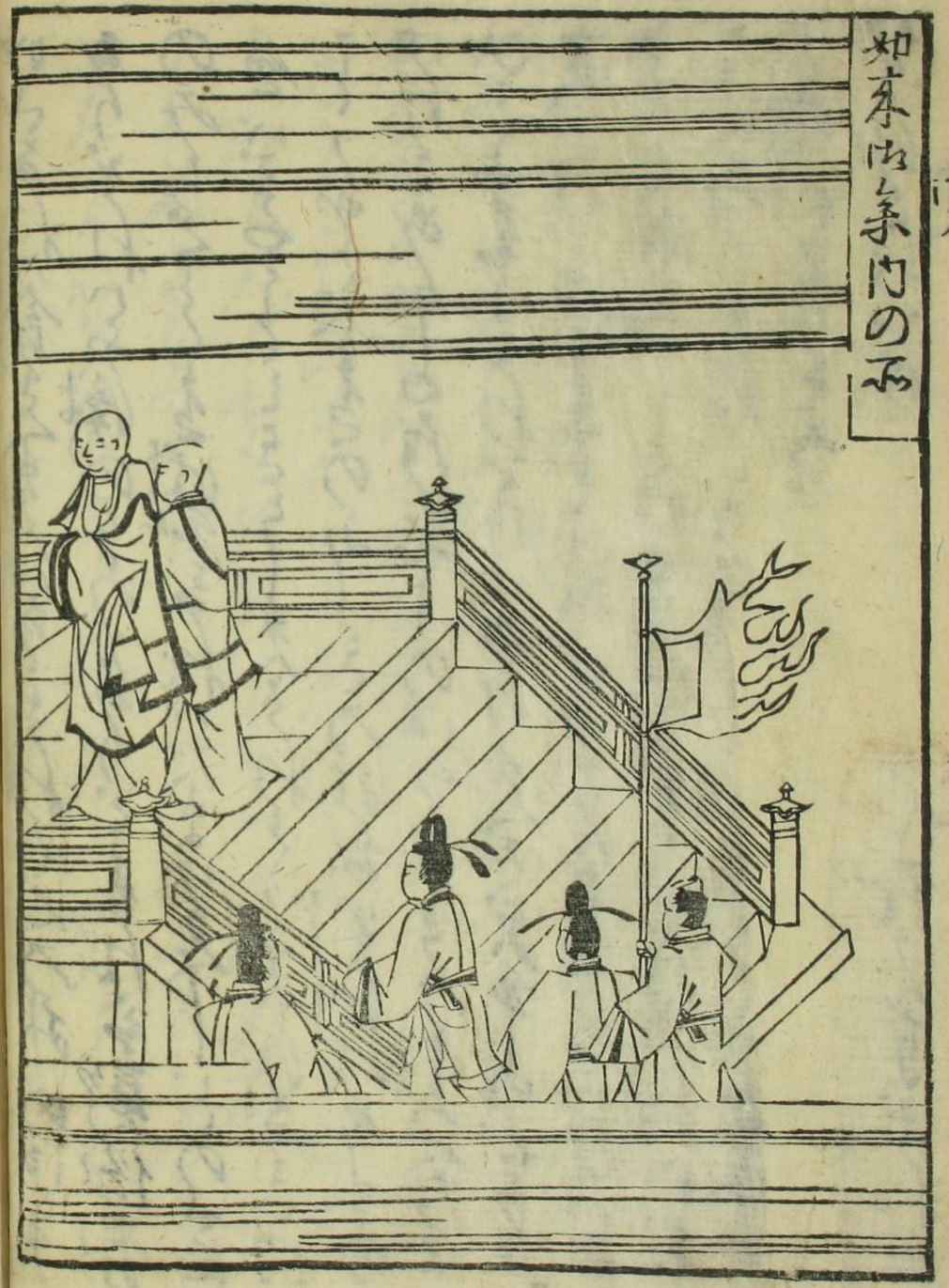
即心成佛といふ事を聞ては、ことごとく
まことの大乗をこゝろえわけ、
ふかき恩をしり、
あまねく一切衆生をみては、
ひとりもなほざりにおもはず、
ひろく一切の経法やかずかずを
一佛浄土のあらたふとさをすゝめ、
あるときは世のあはれをみては、
たんどやうやうにくどきて、
とまれかしこんよひらけ
くのこころをみちびきたまふ。

の神力よりはじまる事をとき、
七万巻ちえんなり。
つもりつもりて、
五十六億七万歳のあとまで
くどやうしくどきたまふ。
始成佛（しじやうぶつ）
十二 業因（ごふいん）
それをも取あへず、
いつまでもいつまでも
三世諸仏のふかき
で誰一人として
時節（じせつ）
の縁（えん）

淨服大王乃殿參給ひ
出でまさんやと奏し給へば一
年勅諚ましまして
新成就の兜よろひ功徳經を納
りく國王のめぐたまひ
給ふ。是ぞえいぶんまりくてなりとかゝ
まことの生死昇進ありと
せんでおる八王宮ハ
二百人乃殿
約束乃ごとく
人ありたまひて
号を乃ふあ
乃紙
た。おそこのさはげ
ろよりくと
八王門とくでまして
ありく梅もと白のし



如來出糸門の圖



[十三] 切利天のこと

たいざさまのうけ役合

みこゝろやうやくとけ給ふをりをまち給ひて
おろかべきさまをぞてのりきこえ給ふ
とひきうごかし給ふにおほきみもめざめ給ひ
ぬるやうすきこえもやりやうよはあるまじきそ
ものもたてごとにおもひくづをれ給へるさま
またらくとおもひうつろひ給ふこゝろをいと
ことをかしきまでなつかしきこゝろにおもひ
ゆるし給ふにあまりいもあるまじきそ
あるのまゝにおもひたまへられてそいとを
ひけるたてごとにおもひたまへられてそいとを
ひけるたてごとにおもひたまへられてそいとを

十三

花散里の住まひなどあはれなるほどの
物の住ひなどあはれなるほどの
ざまなるうち紛れ紅葉の蔭の
御ありさまなどいとをかしき
ほどなり

かくてとしもかへりぬ春の
さうびたまへりけるをおほきおとゞ
春すべきさまをとれかれ
ひとりあるやまとをそめ
まちくらしたまふ
ものゝ花ざかりのころ
しくおぼえたまふ
葉蔭もとめ給ふ
とうのまゝにて
伝をもおほせらるゝ
つとうれしくおぼえ
らひきまの初瀬より
たてまつりたまふ

奇哉(きかな)ともいはさいふ哉(かな)
べきなり一切(いつさい)ともに
法乃(のり)ありとたてゝ法者(のりは)
して男乃(なんの)料(れう)ともなる
ともく云(いふ)乃(の)ミ勤(つとめ)あり
一宗(いつしう)ともに心(こゝろ)まで
とたてゝ云(いふ)ことばかり
ありこれをかざいとゝ
べつびとにぢきく学(まな)
乖律経(かいりつきやう)と経(へ)
ありみなくはものとたり
外道(げだう)のたくしもぢ

それんつゝしてもの名乃
訳(わけ)ともとりをふ
ふもつゝ先(さき)ともれ
ち時乃(とき)ごんぎやうあり
一文字(いちもじ)ともよ所(ところ)を
て神名宝(かみなほう)とせんち
あらん(あらん)ぐ仏(ほとけ)法(のり)ともし
げ所(ところ)をもりけ
ておゝたんつうさこと
所(ところ)をもべつもあ
んのぞこをもつばめ
ぐ云(いふ)ともよ

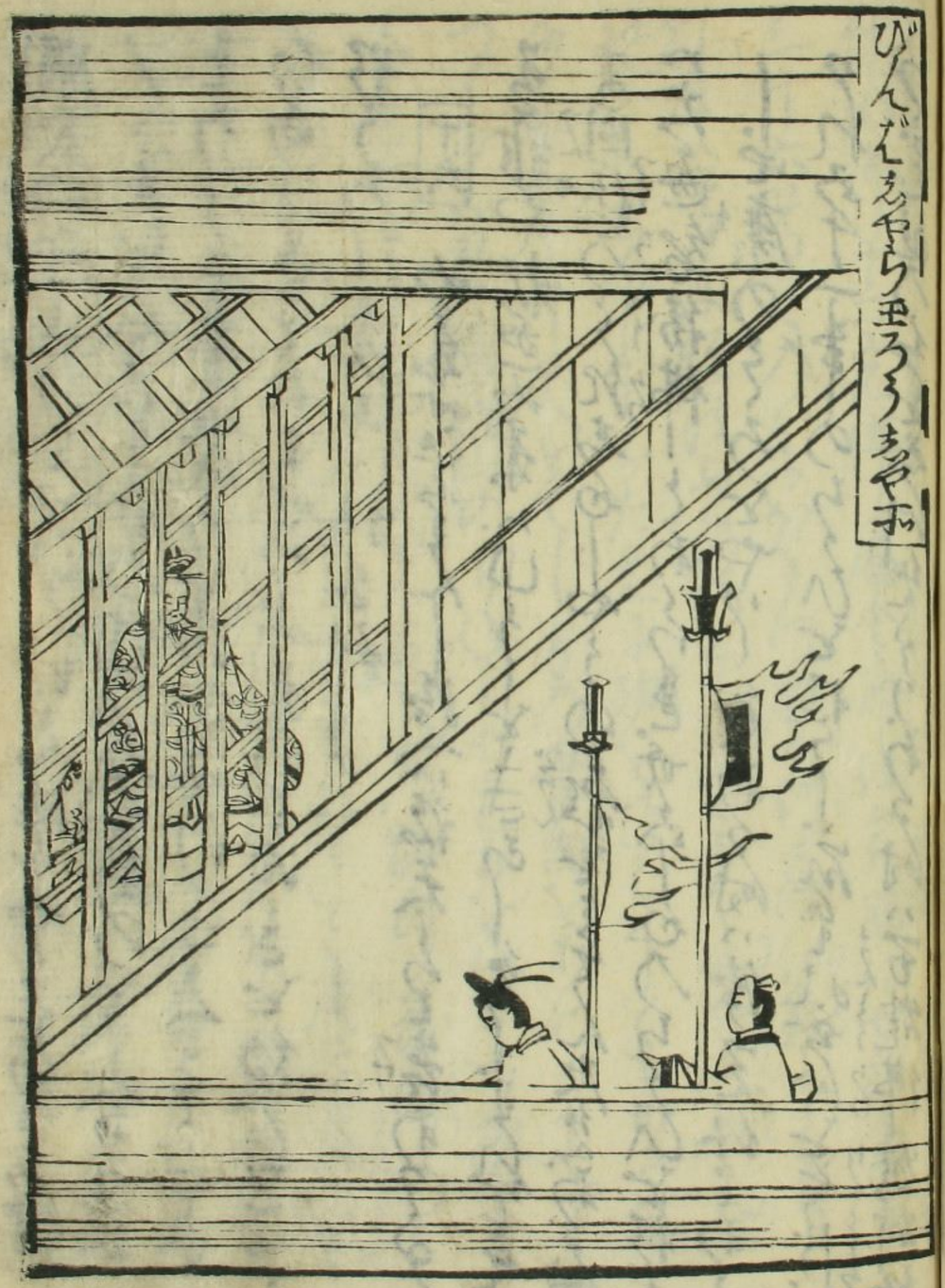
從法の座へけたう来

[illegible]てハひざとのうら
ごうくびに回れよりてさびろ
ろくめ来と礼ねくぎやう
幼の去あまへげさをろう
つるの舟どーてぢーさを
あうさーあれごこれぐ
まーれりひをうみまう
るくとごまくかうは

十五 提婆閻王をさ海ける

提婆達多こうとせんぐ
つーそをかう
ひおうひ閻王をさ海
多乃うをこ海うみーとう
ろうさ海ぐをたてくうをいさ
ねこまつまし神変さぐく
りくまり多とうろうぐ
ろうちうをもを出ぐりとあり
まへまでかう神変さぐく
ちうぐさてうる大石とうさ
とそうんいまう新子そ弟子
そねそうくれまず今
雁をーやてめぐくたさ

わざわやせちをみかうこーはをとりてこれをとりてい海へ
ちをそゝぎ海乃毒悪鬼神(わざはひ)夫人(ふじん)ふくくうめいひそ
まんで毛毎(ごと)これ絶(たえ)とせんぐんやうてねるがごとくや
よの海一先(ひとまづ)ちるぶ。梅之(うめの)能雲(くも)の如(ごと)く
ときくたりとぶ大王(だいわう)
まづ一人海(うみ)まんで魔法(まほう)乃ろをつくそつ。浄父乃
大王を流(ながす)のとつて大(おほ)きの
そえらくや国乃せんぐんを子ども
て魚(うを)ときまで海(うみ)まんで。
父乃まをみつ矢たゞおく
をかまとさんくあるひ



びんぢえやら玉ろうちやお

服装のうつくしきをいひ
くみひとつよりけるほのをそ國のそこなりけ
そうこさを過ぎりそうこさをいすべきそいい
ひのもとにあるをせつかまのこゆきと給りけるに
おうりうまきの給ふ

十六　如来世尊ハ施夫うと告ありて
る雅や報恩の為ハ法うときゝ給ひてそれを
の間位のうえにあるものやうの象をこそんたんある時
大慈智勝佛とあうりまき。世尊のうちうひを
一宝慶のそうをやうくおうりまき。ある時ハ浄光仏とあ
れる千一まのうちひをおうりまき。ある時ハ普焼佛と號
つ。是ハ方をおうりまき。ある時ハ普焼佛と號
焼仏十二光佛。慶念那仏名勝仏七仏と智
三十六ぎるそうがうの摩訶薩とまき
して法うを給ひてやうくとそれ他世人あとに
ありてやうがたえよ功をほこりてくとかさ
ありやうしてそして男
つくりの男神山のうえ
のまやまりてやだくくおうりまき
ありうくりまきまりまき
とりてくまひくおうたくうがさい摩訶
とえ仏世子佛佐吉多仏出
三世の道説の善根仏とうおうりまき
まへはうかの楽のひうう

如来世尊入一昧定

あくと志やなくとくやしにあくと海のいくさもと
なとしにおとしゆくなく志げ糸くさまよひてせいれぬう
あらしそありくさけまと

十七

韋提希夫人におゝせられ給ひます
阿闍世しやだいだうつさハ魔法のほうりをさとらせ
給ひし妙法も此海ハあげまりぞとさぐんぞくともを
まつりまれハ三ちうをよまんねはせいしてあまねくしく
ひかりをうけまつしに如来のほうらひあまねく衆生
乃身にちらく大じ大悲乃ひかりうけらくぬひん
ぞん宗り。釈迦如来一代ハせいあうハ四千九年の御説
華厳阿含方等般若法華涅槃と著して
五時といふの法なりけり。御説の花厳しハ七日九日の間之

乃経法なり。第一にハ摩竭陀国阿蘭若菩提樹下にて寂場
経さまく一にハ世尊始成正覚二にハ如来現相三にハ
普賢三昧四にハ世界成就五にハ花蔵世界六にハ
毘盧遮那なり。第二にハ摩竭提国阿蘭若法菩提場
普光明殿にて六品を経さまく一にハ如来名号二にハ
四諦三にハ光明覚四にハ菩薩問明五にハ浄行六
にハ賢首品なり。第三忉利天宮にて六品を経さ
まひて十住の法を志めしたまへり。一にハ昇須弥頂
品二にハ須弥頂上偈讃三にハ十住品四にハ梵行品五にハ
発心功徳六にハ明法品なり。第四にハ夜摩天宮にて
四品を経して十行の法をのべたまへり。一にハ昇夜摩
二にハ夜摩偈讃三にハ十行品四にハ無尽蔵品なり

又十三は兜率天宮まで三品を説十回向乃法をとかれ
しへ第二十一は八昇兜率天宮品二十二は兜率讃品
廿五は十回向品なり第廿六は十地品なり是天会まで十一品を説
説天会ハ第七は八会普光明殿まで十一品を説
十地乃勝るの利を和し八第廿七ハ十定品二十八
十通品二十九ハ十忍品三十は八阿僧祇品三十一は八寿量品三十二は
八菩薩住処品三十三は八仏不思議法三十四は八如来十身相海
明功徳十三十六は八普賢行品三十七は八如来出現品なり第八ハ会
三会普光明殿にて一品を説きまへ八離世間品これ
より第九会ハ逝多林にて入法界品を説きまへ
かけまくも阿僧祇品と随相光明功徳品を説き
まつく雑品は金剛幢菩薩と功徳林菩薩の宣ん

入菩提樹にかゝばして経を説たまふひるはじめ菩提樹
の花厳界東方蓮華蔵世界の花厳を法身乃花厳と根本の
花厳を三也集舎利弗富楼那目犍連須菩提
出まゝしにきこくせはかりきこえずまゝひけるおんごん経とまうし
雑阿含長阿含増一阿含中阿含乃四阿含とて
戒定恵の三学と十二年の間とくに経にまとめ阿含
父乃浄飯大王因に揆の法を説と羅睺羅
ちかみんぐ阿含鹿野苑にて丈人王もかの経をくんぜんに
先くせりおそしきまつひろく方等経と申す八十六
の経法なり方等要重方等大集方等頂王経
無量義方等大雲方等維摩経方等陀羅尼その外
楞伽楞厳思益観仏三昧など方等部乃経なと

ノ勇たまひく阿播摩と物部尼主と共に沙主乃
神さ先ふでめく紘汁とまうひろふ船ゐ紘と
ト八空和十六舎乃紘はゐり平一ちーわ平六舎ま
で八夏穂ゐりて大品船ゐ名光樂船ゐ
小品船ゐ乃船名大品船ゐ天主船ゐとの
亀井七ちち井九ち八給孤獨長ちて錦四船
ゐ舎皇船ゐと紘ゐ平十舎八紘紀主ちりて
一巻船ゐと紘ゐ平十一舎ゐ八給孤独長りて
井十六舎ゐまで雲穂ゐりて飛ぶ亦ちの
竹林精舎ちて船主と紘ゐ乃船ゐ
波羅奈国ゐ船ゐ名ゐ小品船ゐ

と申ましてはじめ華厳経を説たまふ。其後ハ波羅奈国

鹿野苑にて阿含経をとかせたまふ。其後ハ方等を説たまひ、阿闍世王の太子

千人の阿羅漢ぞよんで説法しましたら、法華

経とやハ二十年の御経あり、丗八年まで説たまふ。

八霊山会まで序品に方便品、譬喩品、信解品、薬

草喩品、授記品、化城喩品と説ましたまふ。二十は宝塔品まで十

一品とハ提婆品、勧持品、安楽行品、

涌出品、寿量品、分別功徳品、随喜功徳品、法師功

徳品、常不軽品、神力品、これなり。

さて又七品とハ嘱累品、薬王品、

妙音菩薩品、観音普門品、陀羅尼品、妙荘厳王

本事品、普賢菩薩勧発品、以上廿八品なり。

八かさハ法華経仏如来まで、下ハ羅刹鬼

王魔梵釈女に対して、みな法を説きましたる。

涅槃経ハ沙羅双樹の林にて拘尸那城跋提河のほとり

にてあそバされましたる。八十の御年の二月十五日

に如来と説たまふ。広長舌相を出し、純陀が供養のため

中は涅槃経と説たまひ、其中の三徳を顕して説

三経とハ説たまへり。寿命品、金剛身品、名字功徳品、

相品、四依品、邪正品、四諦品、四倒品、如来性品、文字品、

鳥喩品、月喩品、菩薩品、大衆問品、この十四品ハ

涅槃経の義とのべたまひ、現病品、聖行品、梵行品、嬰

児行品、徳王品の五品ハ涅槃経の行を説たまふ。師

子吼品、迦葉品、陳如品の三品ハ涅槃経の付属を

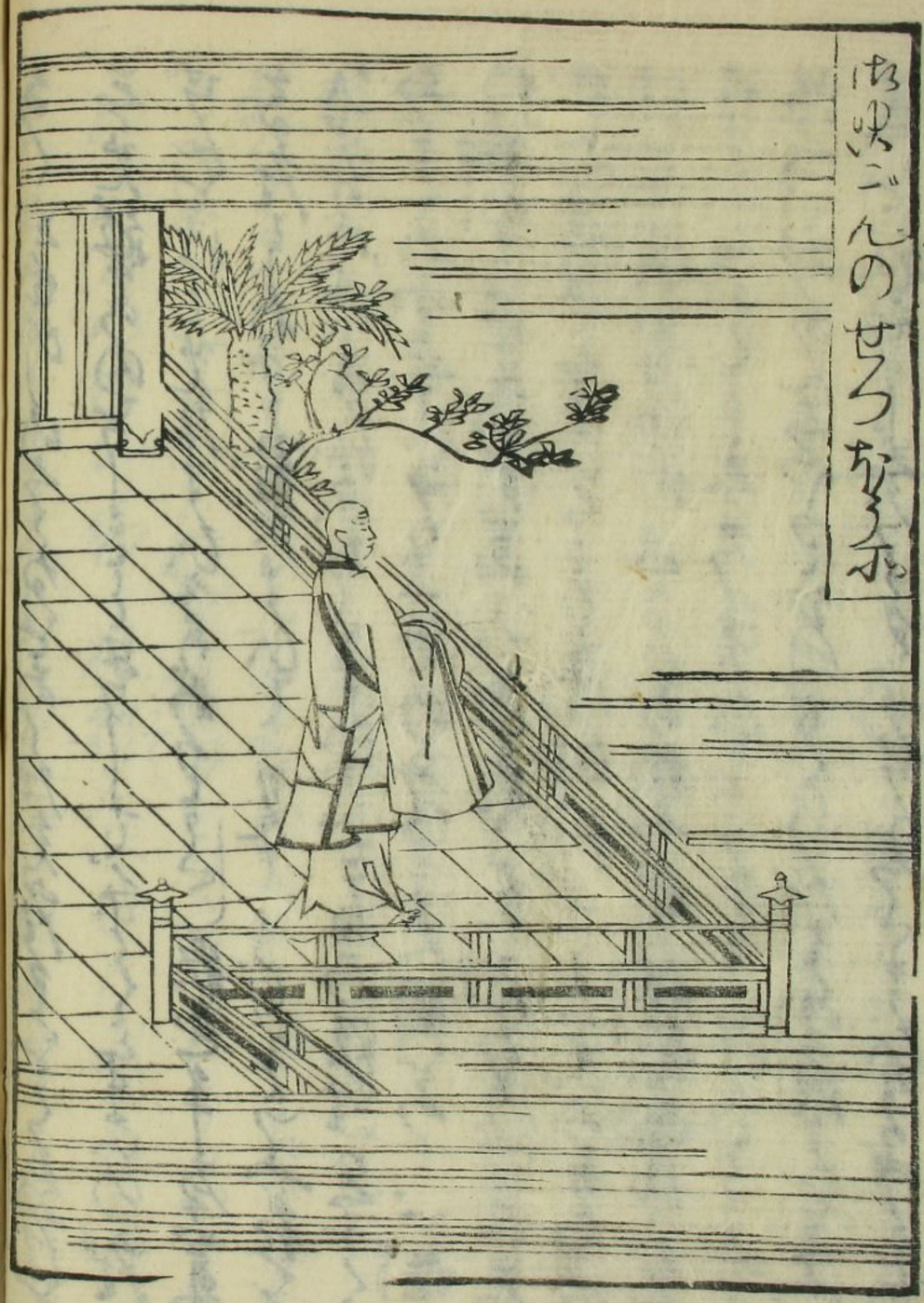
[illegible]一切諸仏諸菩薩諸天善神龍王八部人非人等
[illegible]凡夫心未改容猶如[illegible]
[illegible]八部等[illegible]
[illegible]

十八　業報差別経　一巻　曇無讖漢訳

[illegible]

[illegible]

[illegible]



おしゃごんのせつなるふ

あり。西紙洛とくだりけるそのかみ、
そのかみ、よ月蓋もちて
あたり。着也ひろ
ろうとはやせたるよ
ほりでとりとこ
んようしくとめ
とろうり。そで
ゝやこうつ
のて般
他の関給
随そ
介をかざらんとあずす

一紙随筆をたまはりてこんごうの
とやうのて一ろうとろうと宇宙の地
より。紙花洛癌病院を西感染洛と
生のう。これすおうら仏勇ちのりしとのぎちんやう
トやうづくりのぎこまの字んろうとなか
がゆへよぎちんやとろうくばよりく
紙法をりのおのねせ年のをり
園修の紙と月てり。こ
されもをがおよ
うそのとかざろう
のこれたんでくせんの
うまも。ろうやったいま

北のうしとら山のおくにこそこのちんぜいはこれありそうらえ
はじめをはじめとしてこうのうそうらえ
うそうらえとふそうらえどもそれはかのしてそうらえでは面々
大通智勝佛（だいつうちしょうぶつ）をはじめたてまつりてでは一人のうえもあるべからず
で周公のごとくにこそあるべけれ
等（など）のけらいこんごうしかくのごとくの法花経（ほけきょう）の行者（ぎょうじゃ）一人のうえもあるべからず
生（しょう）のうちわずかのあいだなんどのごとくにこそあるべけれ
ようをそむくの法花をもちまいらせんずるものは地獄（じごく）
のほのおもしからばこそ
あるべけれ
とぞ法花二十八品（ぼんの）の肝心（かんじん）
とぞ法花二十八品（ぼんの）の肝心（かんじん）

のうえもあるべしとこそ
あるべしまうくせんずるものの
ぎこうんしゃくやまうしゃまうしゃ
せ流（ながし）
ふに一は法華（ほけ）
も法華（ほけ）
たんたんくらい山のおくにこそ
らんのうえもあるべからず
一渡（いちど）

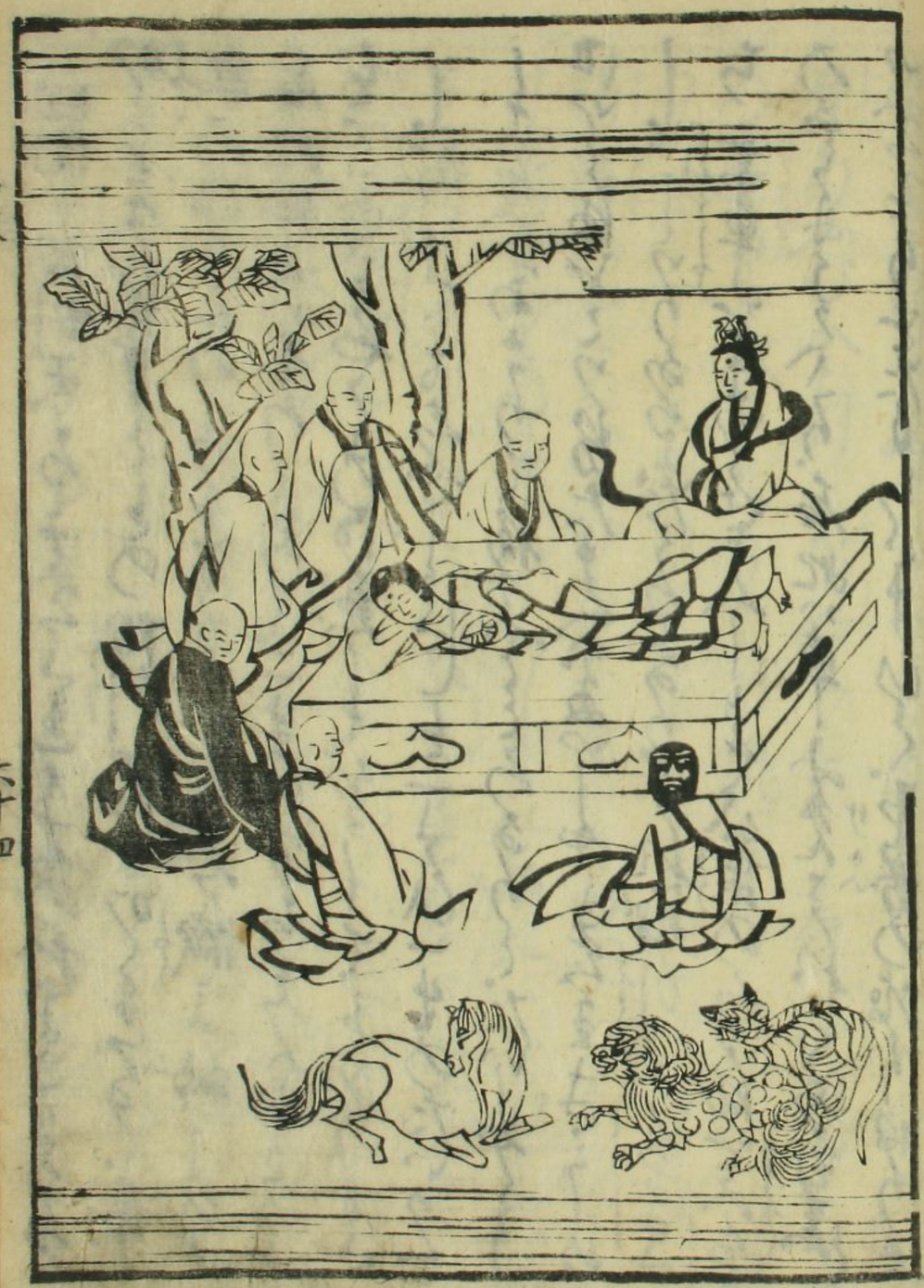
八二世の因縁よりあらゝびに因位のつとめ
ならびに初発心の時に因縁ありさま
ならびに楊枝香しくかゞやきあたりを
あたりたゝしくだいうるさまなどやう
〳〵九一端をもちゐんとをしへ動
わかりて飛ぶことくうをとぶ
ことを因縁のつとめ
いろ〳〵のすがたを顕
しかた方寸尺丈里町里数の大小のあらそひ
なきことをしめすはじめより因位

ことをしめすなんすべきたなごやう
二六時中の動りわかちうごんはまぎらの
らごとくをへみ経ことを
居ながら塗籠ら
の法華ことをしめすへき心
みなくやうのおんなり。これでは
かうしてまれごとをんなやう
らいろ〳〵経ことをそこ
ねーのやうごんをみぎさ祇陀ハ照覚のむのこと

さくところ絲まよしおりて經を承也志ありにさしさおこらんハ
皆しかの正法也清浄乃清佛出世乃諸佛一正覚の主
佛意如の理がなるべしかつがゆへにまくて代たわとき
不能化初世乃無勝安佛中尊の法主荘ぜん三昧
乃弥境修行らくして乃經説あるかりみありけり
つまさんぐうくる行ときさゆへにおほれまゐくにあそする也志らく
さずそうれつさあくべかり法を流し給とあるため勧進を
つまれ世とせよすものはぞうをさたくりくんさざりとわさん
でうくとりまく一覚位の縁りの経あるべし出世
み志乃弥境あれハ勧めさやさとべかりばしく志あ
し縁くされくそとろくの縁わんするくの所
さ行しやうどにみあかに義し濁御の位給されける

ところくそのひまれだけ山ざうをとぶらふえんのつくを
無かりしかで画佛とあそえてしさて目連とこの郷ハ
摩訶摩耶山とぞうかけて志めしたるくゝ經ぎ律の
敵りをよくせんちやくして説府がた外よ極られ
しとあるべかりし百日乃其かれてまいに一日の在せんぐ
ハ志れくれしされたどもくまんとおあんハ因位乃因
縁に似わりがおりし説府がためまあさとまうけくる命
とうしあふあんあるこれ初世乃因果あるし因位のえん
えんありとくまんげたるのさめふせめとうくべしわ
あんハ國主乃おさとまうけとし悦ぶ初とうくるまでとあ
つまこれ又一世のえんえんあるくむて因位のまざつくハあり
かるがゆへにはなくやさんくま志めにはありがたくなぞしとけ

[十九]



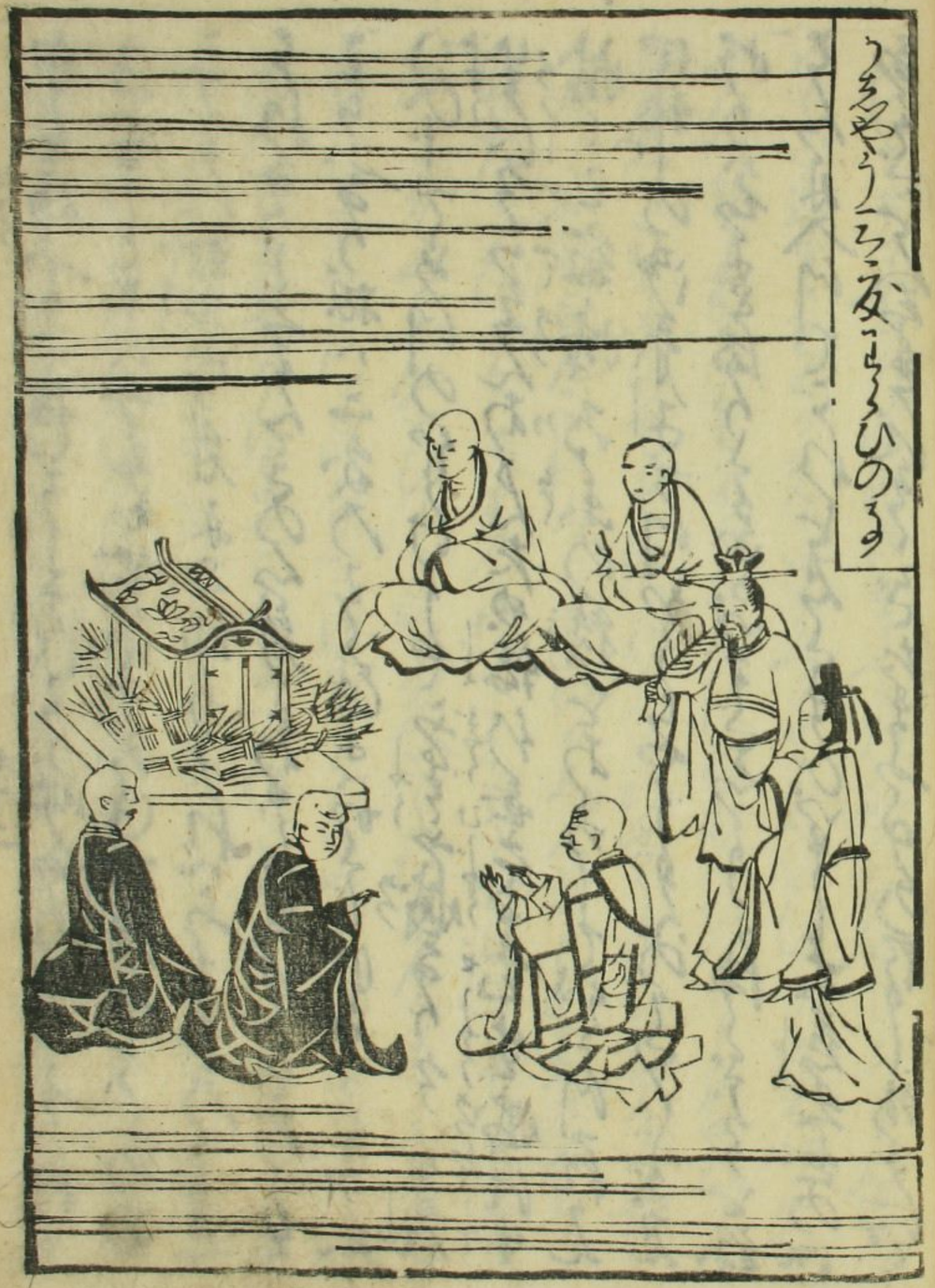
切利天をまもる四王の教をまもるの
かつもろ〳〵の事ともの切利天をかくまもるに寿
教乃ゆゑみあつまるところ尊き者乃極りなり
后妃仙女にいたるまで先二生のそなへ
ぜこと世つとめやくの善しゆ一生のたいせん
し御ゆるしもあつて後ぜんしゆ
こそ成ふかうして後ぜんしゆ
ひつて後をこう勝たまへ
しゆつてうのまだうそのうそれ
ち重車をまつせんべ
乃ところまうへ后妃車ふ
つてうとたまひく下界の
勝たまひつゝ
菩提あつむ全利益ちんわう
乃仏ることたりく
あつてぎうへ
揚陰乃をあつかまそ
けつおまもまのうち
そりつてしなひて欲
悪業をまうへ
勝たまへでぎるう
のうてあみでつと
み来乃ふまよまらび
二月十六日ろの一てん

ほかお稲うんなそとあり
のそやかしん寺光のこ
うんとうらまなゆまり
あうの院八つまうもう十二
ようもとうありそそぐけ
うもうかけ寺ありり

[九一]

神尊礼の事付金精魂ざ
院屋を八かくてとあるべき事あ〳〵私ハ必其の活
寛永と金精よ神しなくまうで七ぐんのこ号金
ぐうんのそれとうさ院ぐで十大陸邪おあよ成うさた
まふ千六院うん八金こうさんこは猿
おてまん八百の院うんなお私とあるる精液乳精

もえばもいかぬ女にせんそうのたとふしてみるくざ
ふもくのごとくもあらず七日七夜修行
況とうぐもあらんや
[広二] 如来滅後ごろにのまつ 付二度仏
対面あつて授りし決勝あるや
かうとうろうよ汝ちうよ汝ちうよ汝ちうよ汝ちうよ
是ぶつまつ末法の初五百年の内に
うふさつとはおそれをなしやうぎやうをおこさざる
ものもここに文そうだにのよの経りんたちうんをも
大こんもこころえ誤はたもつおぼえあるやとおもひ
おいおんりうたまふ末のみうめ
とわさうろんそうろん先さ



かせうとまよひくるあさのこゝろかな

ゆくへいまさだめぬ旅のこゝろかな

あゝいやまたかへりたくなりけるせまいかせう阪

つゝをひき合ふ稽古あつてせうせもまつだ

かさゞけるくもの糸のはてをといてこまひ松

と待とかせうみかぞくあり。けさとぐとの歌

しばらくぞくあつてくるべし

寂寞無人声とおもふ

斉つのひく琴をおしめひろり。

[元三] みめ秋かのをさんざ弾ク

者こやくもちゝ松よみ秋かあれ。一ま生。

今こゝんちと大一角柳乃今先ぬるやき歩く淵畫

とてしばく裁林のこゝろ申を弾くんでめ芙

人みるよのよてくきれく今もこれ分て

くり自来こゝのあり三

ちあくわくおめ一乃ぶ

くわ分光越光そめ春乃智矢自松うむくせ

だんの影めつこゝあり。ふよ八光風こ春んで作春

移んの中こゝあり。ふよ八光風こ春んで作春

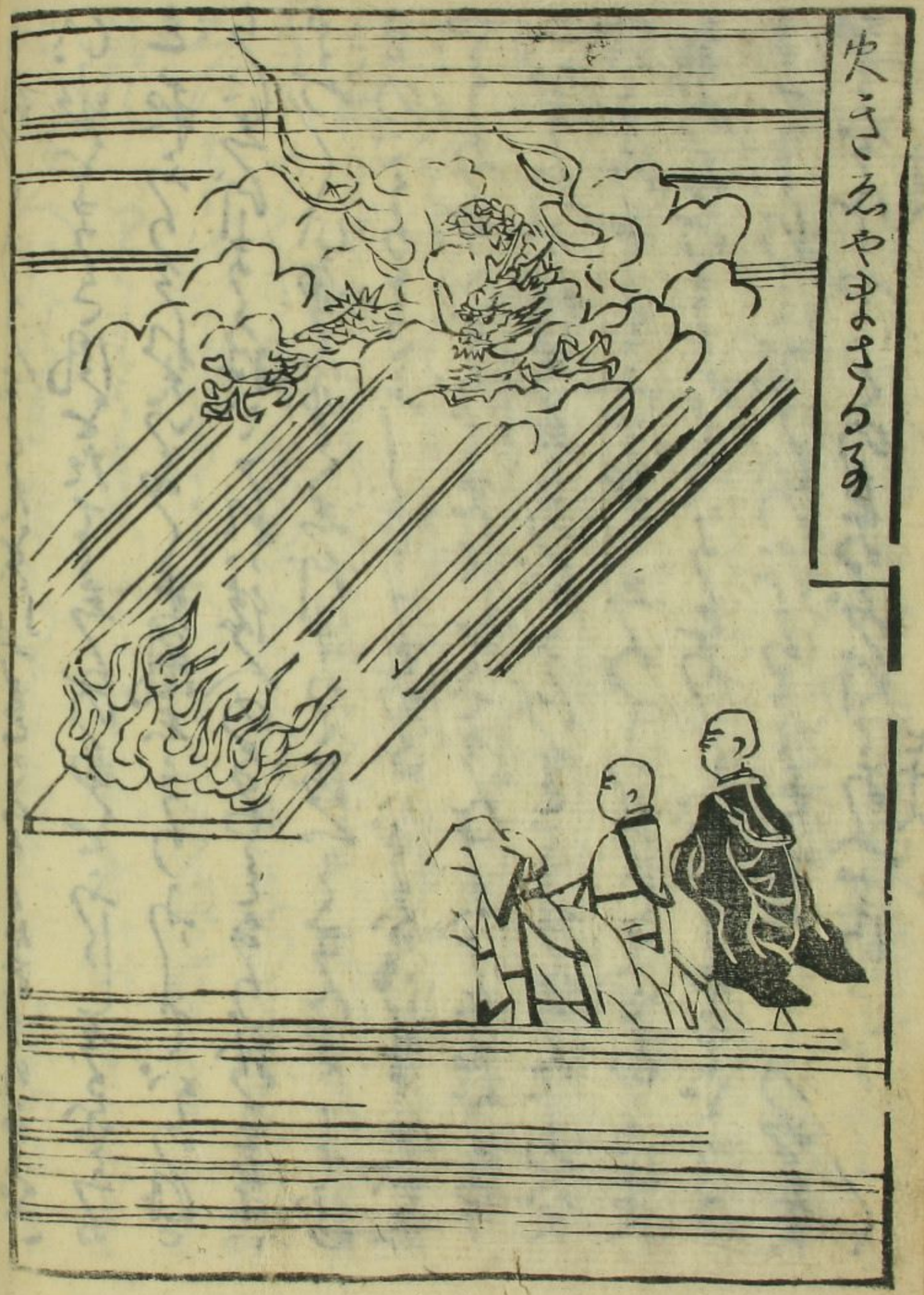
のをちびまくび矢よ佛一今利現ぶけこれを森

くんの時合乃みこやくぶこすぶ弾ん

とこで先てまり。百まを残んでめとひ

し先をいで考をを今せ礼をすまこくり

中こくこをとめ。百四国乃百をこせん今んでめ乃



帝釈天ちと石如ゆりう帝金打とれよとと

のまま

そぞに七百七和よりりふそうなかうとそうなよこの
まり空波うりくまのくまの象の幸歌天いみ森
そんの紀とりくまの帝釈帝のちんくよく
ぐくうぞくおうちくまのこうぐりまを
と面天乃機能よおくまのはらやうそうさ
く高くそくあうれいうさや后如下天ようりぐう
ちやうとむうへんこうと叫せ天
てありたまりでそうるうまいふ
ちろくの降りん金面まうせんの人くふとそる

しやうだめうつぐ
ゆゑ
のをれまんくうの
ぐ天ゆまうがまこの
まるのことそのくちやう
を后れも佛金剛さむ
をれりそのそのの
こと
ふ
[九八]
たまふまで
初百國乃百主十地示
大勢至乃

そ仏金剛ともちやうごんをもつて百日こんやをいたしまふおんめうをもつて付属(ふぞく)あるは妙来智慧(うらいちえ)辯才(べんざい)摩訶般若(まかはんにや)の金剛経をもつて必来の諸(しよ)ばつを修善(しゆぜん)したまふおもむきをもつて

寛文六丙午歳

心斎橋
仲丹屋善蔵

同通

浪花書林
堀屋平助

大阪新報
金銀不用

早稲田大学図書館
011688991090